

子育てカレッジを活用した小児看護学実習の教育評価と課題

上山 和子*・山本 裕子

新見公立大学看護学部

(2015年11月18日受理)

本研究は、小児看護学実習に導入した子育てカレッジ実習の教育評価と課題について明らかにし、今後の実習指導に役立てることを目的とした。研究方法は、質的帰納的研方法である。その結果、遊びの捉え方では、【遊びの意義】【成長発達を促す遊び】【安全教育・安全管理を意識した遊び】の3カテゴリー、子どもの捉え方では、【子どもは常に成長・発達していく存在】【周囲の大人の関わりを必要とする存在】【子どもとの関わりを通した肯定的変化】の3カテゴリー、保護者の捉え方では、【子どもへの思いが強い】【子育てに対する不安を抱えている】【多様な子育て支援を必要としている】の3カテゴリーを抽出した。

これらの結果から、学生は、子育てカレッジ実習を通して子ども本来の遊びの意義、子どもの成長過程、保護者の子どもに対する思い、多様な子育て支援について学んでいることが明らかになった。今後の課題として、発達期の基本的生活習慣について認識が高まるよう指導していく必要がある。

(キーワード) 学士課程、小児看護学実習、子育てカレッジ、教育評価

はじめに

A大学看護学部の小児看護学実習の実習形態は、2012年度から2013年度までの2年間は、2週間の実習のうち、3日間の保育所実習を実施していた。保育所実習における学びとして片山らは、他職種の視点で小児の発達、養育について学習し、小児に関する認識や養育方法の幅を広げ、小児看護の学習を深める機会になったことを明らかにしている¹⁾。

2014年度からは、実習施設との調整や学内に子育てカレッジが開設された背景を踏まえて、小児看護学実習における保育所実習を子育てカレッジに移行し、2日間の実習期間を通し「健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解する」を目標に実習を展開している。

今回、子育てカレッジ実習導入後の学生の小児の発達段階の特徴の理解や発達段階に応じた働きかけ、子ども・保護者の捉え方を分析することにより、実習目標の到達度の評価を行うことで、教育方法を検討する機会とし、小児看護学の実習内容の質向上に繋げたいと考える。また、教育評価から学習課題を明らかにすることは、次年度以降の実習指導に役立つと考える。

本研究では子育てカレッジを活用した小児看護学実習の教育評価を明らかにし、先行研究と比較検討することで、今後の小児看護学実習の教育方法に活かすことを目的とする。

1. 研究方法

1) 研究対象

2014年度に小児看護学実習を履修した学生63名の子育てカレッジ実習の総括記録の内、同意が得られた51名分を対象とした。

2) 研究方法及び分析方法

小児看護学実習における子育てカレッジ実習の「遊びの捉え方」「子どもの捉え方」「保護者の捉え方」の3つの観点項目からなる総括記録を教員2名で内容分析し、学びや課題を抽出する。そして、質的・帰納的に分析後、カテゴリー化する。カテゴリー化については、研究者間で検討を繰り返し、妥当性を高めた。

3) 倫理的配慮

2014年から2015年にA大学小児看護学実習の修了者に本研究に関する説明書を配布する。説明の文書には、研究目的、内容分析によるデータ処理、匿名性が完全に確保されていること、成績に関与しないこと、参加は自由意志で拒否による不利益は全くないこと、同意が得られない場合は、データから外すことを口頭及び文書で説明した。

尚、本研究は、A大学倫理審査委員会の手承を受け実施した。

*連絡先：上山和子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

2. 小児看護学実習目的²⁾ 及び子育てカレッジ実習の概要

1) 実習目的

小児の発達段階の特徴を知り、健康な小児の養護と健康上の諸問題をもつ小児への看護実践を通し、各健康レベルの小児の健康問題を捉える能力と態度を養う。

2) 実習目標

(1) 健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解する。

①小児の身体的発育・運動機能・情緒・社会性・言語の発達の実践が理解できる。

②基本的生活習慣の自立への援助について理解できる。

③小児の発達に応じた遊びが理解できる。

④小児の安全教育・安全管理が理解できる。

⑤小児及び家族について関係性が理解できる

(2) 各期の発達段階別の健康障害をもつ小児及び家族の看護問題を捉え、援助の必要性について理解する。

①対象者は、小児及び家族であることが理解できる。

②健康障害が小児及び家族に与える影響について理解できる。

③健康障害をもつ小児及び家族から得られた情報をアセスメントし、看護問題を捉えることができる。

④健康障害をもつ小児及び家族に対して必要な看護援助を立案できる。

⑤健康障害をもつ小児及び家族に対して必要な看護援助を実践し、評価・考察できる。

(3) 小児の保健・医療・福祉・教育について理解し、幅広く健康問題を捉え、小児看護の役割を理解する。

①乳幼児健診・育児相談に参加し、育児指導や疾病予防について学び、個々の小児と家族への指導のあり方が理解できる。

②急性期の小児に対する看護と家庭療養に向けた指導のあり方が理解できる。

③慢性期の小児に対する継続看護の必要性が理解できる。

④小児に関わる保健・医療・福祉・教育チームにおける連携及び成育に関する小児看護の役割が理解できる。

⑤小児の保健・医療・福祉・教育を通し、子ども観を深めることができる。

3) 小児看護学実習の概要

実習内容は、病院実習と子育てカレッジで構成する。前週に学内において事前オリエンテーション、バイタルサイン測定、身体計測やベッド柵の取り扱いなどの安全

対策について学内演習を行い、病院実習後に子育てカレッジ実習を行う(表1)。

表1 小児看護学の実習展開

			*前週に学内において事前オリエンテーション・学内演習 実習方法及び内容
1週	月	実習	病院実習：オリエンテーション
	火	実習	病院実習
	水	実習	病院実習
	木	実習	病院実習
	金	学内	カンファレンス・子育てカレッジ事前訪問
2週	月	実習	病院実習
	火	実習	病院実習・反省会
	水	実習	子育てカレッジ実習
	木	実習	子育てカレッジ実習・まとめ
	金	学内	カンファレンス

4) 子育てカレッジでの小児看護学実習の概要

子育てカレッジは、2008年に親子交流広場「にこたん」として誕生し、地域協働型子育て支援として子育て中の親子がゆっくり安心して過ごせる交流の場として開設された。活動内容は、基本であるノンプログラム型としての自由な時間、行事や体験等を共にするプログラム型の「にこたんタイム」で構成されている。スタッフは、保育士などが常駐し、子ども・親への対応、学生指導を行っている。開設当初は、週2日間であったが、2014年から週5日間に広げられ、子育て支援センター機能を併せ持つ子育てカレッジとして活動している³⁾。

子育てカレッジ実習内容としては、子育てカレッジに来所した子ども及び保護者との遊びなどを通して、子どもの活動性、保護者から子どもに対する思いや子育てに伴う不安内容などを聞く機会とする。この実習形態をノンプログラム型として学生自身が自由に子どもや保護者に関わる実習とする。また、「にこたんタイム」を利用して、子ども及び保護者を対象に、身体について書かれている絵本の読み聞かせや、手洗い、風邪予防のための食生活、脱水予防などについて学生の自作による絵を用い、紙芝居の方法を取り入れ健康生活への啓発活動として分かりやすく説明する機会を設ける。この実習形態をプログラム型として、実習展開を行う(図1)。

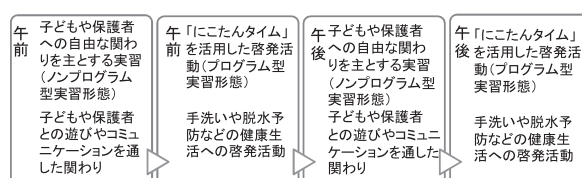


図1 子育てカレッジでの小児看護学実習形態

3. 結果

小児看護学実習目標の「遊びの捉え方」「子どもの捉え

方」「保護者の捉え方」の3つの観点からの記述内容

以下、【 】 カテゴリー、「 」サブカテゴリー、＜ ＞コードで示す。

1)「遊びの捉え方」の構成内容

【遊びの意義】【成長発達を促す遊び】【安全教育・安全管理を意識した遊び】の3カテゴリー、11サブカテゴリー、131コードで構成されていた。

【遊びの意義】では、「子どもにおける遊びの意義」で、＜子どもにとって遊びは、自由で自発的な活動である＞、「子育てカレッジを活用した遊び内容」で、＜子育てカレッジでの遊びを通して、情緒的安定を図ることに繋がっている＞、「遊び道具の充実」で、＜体を使って遊ぶ道具、頭を使って遊ぶ道具のどちらも充実している＞などが挙げられた。

【成長発達を促す遊び】では、「創造性を促す遊び」で、＜何か物を作ったり食べるふりをして遊ぶことで、児の想像力と創造力が豊かになる＞、「社会性を促す遊び」で、＜遊びを通して順番を守り社会性が身に付く＞、「運動機能の発達を促す遊び」で、＜身体を動かし遊ぶことで、身体・運動機能の発達促進になる＞、「子ども同士の交流による遊び」で、＜同い年くらいの子どもと一緒に同じ遊びをしている＞、「発達年代別の遊びの内容」で、＜1歳児はひとり遊びが多い＞、「日々の体験を取り入れた遊び」で、＜身の回りの環境を認識し、それを再現しようとする＞などが挙げられた。

【安全教育・安全管理を意識した遊び】では、「遊びを

通した周囲の関わり方」で、＜遊んだ後の片付けの声掛けが行われていた＞、「安全管理を意識した遊び」で、＜乳児は何でも口に入れるので大人の見守りが必要である＞などが挙げられた（表2）。

2) 子どもの捉え方の構成内容

【子どもは常に成長発達していく存在】【周囲の大人の関わりを必要とする存在】【子どもとの関わりを通じた変化】の3カテゴリー、12サブカテゴリー、129コードで構成されていた。

【子どもは常に成長発達していく存在】では、「子どもの活動性から捉えた行動の特徴」で、＜好奇心旺盛で1人で色々なものを触り走り回る＞、「子どもの身体的・精神的成長発達過程」で、＜子どもは成功も失敗も糧にして心も身体も成長していく存在＞、「子どもの主体性・創造性の発達過程」で、＜子どもは主体的に自分からこの遊びを選びおもちゃに名前をつけたりする＞、「遊びを通じた子どもの成長過程」で、＜遊んでいる中で守らなければならないルールも学んでいく＞、「子どもの情緒的・社会的成長過程」で、＜2～3歳になると年下を思いやる心が生まれ感情豊かになる＞などが挙げられた。

【周囲の大人の関わりを必要とする存在】では、「個別性を理解した働きかけ」で、＜子ども一人ひとり違うことを理解し声掛けをしていく必要がある＞、「子どもの発達に伴う安全教育の必要性」で、＜危険なことを判断できないので周りが教えてあげる必要がある＞、「子どもと大人の相互作用による関わり」で、＜子どもたちは大人

表2 遊びの捉え方

(コード件数)

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
遊びの意義	子どもにおける遊びの意義(11)	・子どもにとって遊びは、自由で自発的な活動である ・子どもにとって遊びは、発育において必要なものである
	子育てカレッジを活用した遊び内容(17)	・子育てカレッジでの遊びを通して、情緒的安定を図ることにつながっている ・他の子どももいる場で集団遊びを覚える場である
	遊び道具の充実(6)	・体を使って遊ぶ道具、頭を使って遊ぶ道具のどちらも充実している ・遊び道具を使うことを楽しんでいる
成長発達を促す遊び	創造性を促す遊び(16)	・何か物を作ったり、食べるふりをして遊ぶことで、児の想像力と創造力が豊かになる ・車のおもちゃを組み合わせさせて走らせる
	社会性を促す遊び(13)	・遊びを通して順番を守っていくおもちゃを使うなどの社会性が身に付く ・おままごとの中でも、「ありがとう」、「いただきます」などの声かけを行っており、礼儀を学ぶ
	運動機能の発達を促す遊び(3)	・身体を動かして遊ぶことで、身体・運動機能の発達促進になる ・少しの段差からジャンプする
	子ども同士の交流による遊び(22)	・同い年くらいの子どもと一緒に同じ遊びをしていた ・Aちゃんは、他の子と一緒に遊ぶことが少しずつできている
	発達年代別の遊びの内容(26)	・1歳児は、ひとり遊びが多い ・3～4歳は手遊びも器用にできる
	日々の体験を取り入れた遊び(6)	・ザリガニなど生物に興味をもっていた ・身の回りの環境を認識しており、それを再現しようとする
安全教育・安全管理を意識した遊び	遊びを通じた周囲の関わり方(7)	・遊んだ後の片付けの声掛けが行われていた ・遊びの中で子どもができたことに目を向け母親も保育士も評価している
	安全管理を意識した遊び(4)	・乳児は、何でも口に入れるので大人の見守りが必要である ・おもちゃでないもので遊ぶ危険性があるので注意が必要である

と違った視点をもっているため相互作用の中で関わっていく>、「子どもとのコミュニケーションの取り方の工夫」で、<子どもには優しい言葉選びが必要で言葉により反応が大きく変わる>、「子どもにとって母親の存在は大きい」で、<母親がいるだけで安心し安全基地の役割をしている>などが挙げられた。

【子どもとの関わりを通した変化】では、「子どもに対する肯定的イメージ」で、<実際に関わってみて改めて子どもと関わるのが好きであると再確認した>、「子どもとの関わりを通した苦手意識からの変化」で、<今回関わることで子どもはかわいく苦手意識はなくなった>などが挙げられた（表3）。

3) 保護者の捉え方の構成内容

【子どもへの思いが強い】【子育てに対する不安を抱えている】【多様な子育て支援を必要としている】の3カテゴリー、9サブカテゴリー、84コードで構成されていた。

【子どもへの思いが強い】では、「子どもを大切に思う気持ち」で、<保護者は兄のことを一番に考えている強い味方である>、「子育てに対する母親の思い」で、<母親は常に子どものことに気を配って、注視している>、「子どもを通した母親の成長」で、<母親も子どもも色々な親子と関わることで、互いに成長していく>、「子どもとの適度な距離感」で、<ある程度離れたところで見守るというのも保護者の役割>などが挙げられた。

【子育てに対する不安を抱えている】では、「子どもの成長に対する母親の不安」で、<お母さん方は「普通」ということにすごいこだわりがある>、「子どものしつけと母親の葛藤」で、<叱る理由や今後どうすればいいか伝えていくこともしつけの一つ>などが挙げられた。

【多様な子育て支援】では、「親同士の交流・情報交換によるピアサポート」で、<親同士で話す機会が増え育児相談をしたりするなどができる>、「子育てに伴う親の役割」で、<保護者は子どもの成長発達を助長していけるような環境づくりが必要である>、「専門職からの支援を受けた子育て支援」で、<母親の不安に対して解決できるようにアドバイスしたり関係機関について紹介できるようにすることが必要>などが挙げられた（表4）。

4. 考察

1) 小児看護学実習の子育てカレッジ実習における教育評価

子育てカレッジ実習の教育評価として、小児看護学実習目標の1)に掲げている健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解することについて、「遊びの捉え方」「子どもの捉え方」「保護者の捉え方」の3つの観点から分析する。

「遊びの捉え方」では、遊びの意義として自由で自発的な活動であることを理解している。子育てカレッジは、

表3 子どもの捉え方

()コード件数

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
子どもは常に成長発達していく存在	子どもの活動性から捉えた行動の特徴(15)	・好奇心旺盛で1人で色々なものをさわったり走り回る ・午前午後とも非常に元気で、自分の好きな遊びを熱中して過ごす
	子どもの身体的・精神的成長発達過程(8)	・子どもは成功も失敗も糧にして心も身体も成長していく存在 ・子どもは、身体的・精神的にも発達段階にあり、大人による見守りと援助が必要
	子どもの主体性・創造性の発達過程(6)	・子どもは、主体的に自分から「この遊びがしたい」と言えたり、おもちゃに自分で名前をつけたりする ・子どもは、泣くことで訴えたりする
	遊びを通した子どもの成長過程(9)	・遊んでいる中で、守らなければいけないルールも学んでいく ・年の進んだ子同士であれば一緒に遊んだり、他者とも交流を深めている
	子どもの情緒的・社会的発達過程(13)	・2～3歳になると年下を思いやる心が生まれ、感情が豊かになっていく ・他の子どもと関わっていくことで、協調性や善悪を少しずつ学んでいく
周囲の大人の関わりを必要とする存在	個性性を理解した働きかけ(15)	・年齢だけでなく、幼児の場合には月齢も評価のために重要である ・子ども一人ひとり違うことを理解し、声かけをしていく必要がある
	子どもの発達に伴う安全教育の必要性(9)	・危険なこと等の判断ができない部分もあり、周りの人が教えてあげる必要がある ・何にも興味を持ち、危険を想定せず行動するので、危ないことをきちんと教える必要がある
	子どもと大人の相互作用による関わり(6)	・子どもたちは大人と違った視点をもっているため、相互作用の中で関わっていく ・子ども笑顔の人の方が恐怖も感じないし、一緒に遊びやすい
	子どもとのコミュニケーションの取り方の工夫(11)	・子どもには優しい言葉選びが常時必要となり、言葉により反応が大きく変わる ・繰り返し名前を呼ぶうちに返事をしてくれるようになり相手の名前を呼ぶことが大切
	子どもにとって母親の存在は大きい(6)	・子どもにとって母親はとても大切な存在 ・母親がいるだけで安心し、安全基地の役割をしている
子どもとの関わりを通した肯定的変化	子どもに対する肯定的イメージ(11)	・今まで子どもが好きという気持ちでしたが、今回の実習でより一層好きになった ・実際に関わってみて改めて子どもと関わるのが好きであると再確認した
	子どもとの関わりを通した苦手意識からの変化(20)	・今回関わらしてもらって、子どもはかわいくて、苦手意識はなくなった ・想像していたよりも楽しく過ごすことができ、子どもたちと関わる事に対して抵抗もなくなった

表 4 保護者の捉え方

()コード件数

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
子どもへの思いが強い	子どもを大切に思う気持ち(8)	・元気が良すぎて大変だし、良く怒ったりもするけど、やっぱり我が子はかわいい ・保護者は、児のことを一番に考えている強い味方である
	子育てに対する母親の思い(8)	・赤ちゃんは泣いても母親に抱かれると泣きやんでいて、母親の力、包容力はすごい ・母親は常に子供のことに気を配って、注視している
	子どもを通した母親の成長(8)	・母親も子どもも色々な親子と関わることで、互いに成長していく ・保護者は自分の子どもだけでなく他の子どももしっかり見守り、親としてすごい
	子どもとの適度な距離感(4)	・子どものしたいように自由に遊ばせたり、人それぞれ子どもとの距離感がある ・ほとんどの保護者が子どもたちが遊んでいるのを側や遠くから見守っている
子育てに対する不安を抱えている	子どもの成長に対する母親の不安(19)	・お母さん方は「普通」ということにすごいこだわりがある ・健康な小児であっても母親はたくさんの不安を抱えており、誰よりも子供の変化に敏感に気づいている
	子どものしつけと母親の葛藤(10)	・健康な児の母親でも、育児に対して不安やストレスを抱えている ・なかなか言う事をきいてくれなかったり、叱る理由を伝えていくことも、しつけの一つである
多様な子育て支援を必要としている	親同士の交流・情報交換によるピアサポート(20)	・子どもだけでなく、親も親同士で話す機会が増え、育児相談をしたりするなどができる ・悩んでいることや困っていることは同じ保護者同士だからこそ分かち合うこともたくさんある
	子育てに伴う親の役割(4)	・保護者は、子どもの成長発達を助長していけるような環境づくりや安全対策をとる必要がある ・母親と子どもの関係を見て、子どもにとって母親が一番安心できる
	専門職からの支援を受けた子育て支援(3)	・親は、生活において細かいことが気になったりすることがあるので、保健師、看護師、保育士の言葉はとても重みがあるため慎重に発言する必要がある ・母親の不安に対して、一つひとつ解決できるようにアドバイスしたり、関係機関について知り、紹介できるようにすることが必要である

ノンプログラム型の中で親子が自由に過ごしており、子どもの自由な遊び場面の中で実習を体験する。このことより学生は、子ども本来の自由な遊びに触れ、自ら体験することにより理解が深まったと考える。

また、遊びは、成長発達を促す観点からも子ども自らおもちゃを選択し、組み立てるなどの手先を使う微細運動や、発達年代別のひとり遊びから子ども同士の交流による同じ遊びを展開するなどの連合遊び、遊びの中で順番を決めるなどの社会性の発達を促す場面を通して子どもの成長発達を促すには、重要な概念であることを理解したと考える。

一方で、遊びにおける危険性を認識できない年少児においては、周囲の大人による安全管理や教育の必要性を理解している。子育てカレッジは、子どもが安全に過ごす場所として、環境が整えられている。しかし、子ども自身は、危険に対する予知能力は発達途上であり、日々の生活の中で学んでいく。実習中に保護者や保育士の関わりを通して危険に対する安全教育を学ぶことは、発達段階の学びと併せて必要な実習体験である。

「子どもの捉え方」では、子どもの活動性から常に成長発達をしている存在であることを理解している。特に年齢の違う子どもの活動場面を同時に見ることで、身体的能力の成長過程を認識する機会となる。これは、従来の保育所実習では、同学年のクラスで実習をしており、年齢による違いを体験することが少ない⁴⁾。子育てカレッジは、主に就学前の子どもが一つのフロアで過ごすことで、様々な年齢の子どもと同時に触れ合うことになり、

より鮮明に身体的違いを認識したと言えよう。

また、1歳までの乳児期の子どもに関わることは、周囲の大人の関わりを必要とし、守られている存在と認識している。

一方、小児看護学実習までに学内での演習を除くと年少児に触れ合う体験の少ない学生にとっては、子どもを苦手としている傾向がみられる。しかしながら、子どもとの触れ合いを通して少しずつ肯定的イメージに変化しており、実習体験の意義は高いと言える。

「保護者の捉え方」では、常に子どものことに気を配っており、子どもを大切に思う親の気持ちに触れ、子どもへの思いが強いことを理解している。

しかし、子育てに対する不安を抱えている存在として、子どもの変化や成長に伴う不安を抱えていることを理解している。これは、直接保護者と触れ合うことが多い子育てカレッジ実習の特徴と考える。

そのための支援として、実習終了後の反省会などで現在の子育て支援への取り組みを指導者より学ぶことは、実習の意義としても高いと言えよう。また、親同士による情報交換や育児相談などを行っているピアサポートの場を体験することは、専門家からの支援と併せて多様な子育て支援の一環として学ぶことは重要と言えよう。

以上より、実習目標に掲げている発達段階や関わり方についての理解は達成できていると考える。しかし、先行研究では基本的生活習慣の食事や排泄行動の発達や関わり方に関する場面の学びが多い⁵⁾。子育てカレッジは、遊びを中心に過ごす場所であり、日常生活への援助につ

いては保護者が実践されており、基本的な生活習慣の獲得場面への関わりは、実習では難しいことが課題として挙げられる。

2) 小児看護学実習における子育てカレッジ実習の課題と今後の実習指導への示唆

今回、小児看護学実習に導入した子育てカレッジ実習の教育評価を分析した。学生は、実習目標に掲げている発達段階の理解と成長発達に応じた支援に注目し、ノンプログラム型として自由に子ども及び保護者に関わり、子どもの成長過程について学ぶ機会を得ることができた。

また、子育てに対する不安について自由に話せる場で保護者より直接話を聞ける機会を持つことは、病院実習における乳幼児健診での育児相談などの体験と併せることで、より子育て不安についての理解が進むと考える。親の子育てに関する不安は多様である⁶⁾。病院実習で十分に関われなかった場合、子ども及び保護者への子育て支援としてのカレッジの役割を認識し、保健・医療機関や保育所施設とは違った支援を学ぶ機会として実習を進めていきたいと考える。

小児看護学実習の到達目標として宮谷らは、子どもの日常生活への援助について取り上げている⁷⁾。子育てカレッジ実習初年度の課題として挙げられた食事行動、排泄行動への関わりなどの体験が少ないことについては、重点的に保護者に食事行動の様子を聞いたり、トイレトレーニングとしての排泄場面に保護者とともに子どもに関わるなどの方法を取り入れて実習目標が到達できるようにしていきたいと考える。

本研究では、遊びの捉え方、子どもの捉え方、保護者の捉え方の3つの観点からの分析であった。この内容は主にノンプログラム型実習であり、プログラム型実習として取り組んでいる内容については、日々の記録には記

述されているも総括記録では少ない。

今後の実習指導への示唆として、プログラム型実習として子どもの日常生活のなかでの健康を守るための啓発活動としてのテーマや実習内容を検討し、包括的な子育て支援について学んでいけるよう検討を続けたい。

謝辞

本研究にご協力をいただいたA大学看護学部の学生に感謝致します。

文献

- 1) 片山陽子・上山和子：保育所実習における中間カンファレンスの学習内容－看護系大学における実習記録からの分析－. インターナショナル Nursing Care Research, 13(2), 101-107, 2014.
- 2) 新見公立大学看護学部看護学科：平成26年度新見公立大学看護学臨地実習要項, 2014.
- 3) 三好年江・片山啓子：大学と地域が協働する子育て支援者研修の成果と課題－「にいみ子育てカレッジ」2013年度の取り組みより－. 新見公立大学紀要, 35, 149-152, 2014.
- 4) 前掲書, 1), 101-107
- 5) 前掲書, 1), 101-107
- 6) 日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医会・日本小児科連絡協議会ワーキンググループ：子育て支援ハンドブック. 日本小児医事出版社, 144-170, 2011.
- 7) 宮谷恵, 大見サキエ, 宮城島恭子：教員からみた学士課程における小児看護学実習の現状. 日本小児看護学会誌, 22(2), 68-74, 2013.

The educational evaluation and the problems of pediatric nursing training in the child-rearing college

Kazuko UYAMA, Yuko YAMAMOTO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan